

## タイの水上居住のしつらえと空間構成

松田 博幸\*, 津田 英明\*\*, 川原 崇寛\*\*

### The Living Space and Furnish about the Water Housing

- Thailand Experience -

Hiroyuki MATSUDA\*, Hideaki TSUDA\*\* and Takahiro KAWAHARA\*\*

#### Synopsis

This paper describes two issues about the present condition for the inhabitant of the water housing in Thailand by the field work and interviewing: (1) the condition of the living space; (2) the condition of the furnish. This study clears two points; (1) The space construction; (2) Interior furnish that are mingled the tradition and modern. As a result, I think we have to carry out a further examination of the transformation of the river-side settlements, and the relationship between life-style of inhabitant and river-side environments in the process of transformation.

**Key words:** Water Housing, Water Village, Raft House, Pillar House, Interior, Thailand

#### 1. はじめに

人類は水とともに生きてきた。それは大きな文明が、常に大きな川の流域に発達してきたことでもわかる。水は、生物にとって多かれ少なかれ影響を及ぼすものである。人類にとって、生きていく為に、必要なものは全てといっていいほど水を必要としている。狩猟時代の人類ならば、大きな川は、なくとも飲み水として必要な量の水さえ確保しておけば、困ることはなかった。しかし、次第に農耕を行うにしたがって、大量の水が必要となってきた。この生活様式の変化のため、大きな川の流域に人が集まってきて、定着化した。そして狩猟文化から農耕文化への変容、移動型住居生活から定着型住居生活への変容でもある。

特に、東南アジアの国々は水との関わり合いが強い。東南アジアは半島部と島嶼部とからなっており、この地形からもわかるように、常に海や川、つまり水と共生してきた。東南アジアで水の神と呼ばれる「ナーガ」は、インドの神話における大蛇ないし龍であり、東南アジアの様々な土着的神話

と結びつき、各地にその姿を残している。このように、東南アジアの各地には神話と結びついた信仰、儀礼、習慣がある。このことから、東南アジアの国々が水と共生してきたことがわかる。このように、東南アジアは各水形の開発とともに文明を展開してきた歴史を持っており、河川・運河・湖・海の水辺居住が諸国全体に展開、分布しており、筏住宅や杭上住宅といった水上住宅が集落を形成している。「水」は、交通手段であり、魚・野菜の食料を得る場であり、給排水、洗濯、廃棄、排泄など、エコロジカルな生活を支える自然のインフラであった。そこに形成されていた、水を祭り、水を楽しむ伝統的な環境共生の生活は、都市化・人口集中や近代化によるライフスタイルの変化などから、水と自然の浄化力が超えたことによって、劇的に変化してきている。

その中でも、タイは、祭りや文学、舞踊、民俗、絵画、彫刻、建築、都市計画等のいずれの分野においても、水に関わるものが多く、その土台となり基礎となっている。海に囲まれ、川が縦横に国内を流れているタイにおいては、当然のこ

\*近畿大学工学部建築学科

Department of Architecture, School of engineering, Kinki University

\*\*近畿大学大学院システム工学研究科システム工学専攻建築都市システムクラス

Cluster of Architecture and

Urban Systems, Major of Systems Engineering, Graduate School of Systems Engineering, Kinki University

とである。川が多くそのため治水作業が困難で、洪水を招きやすく、土地が湿地帯であるところが多いこともあり、洪水の度に断絶する陸地に比べ、洪水のときにでも自由に移動出来る水路が発達するのは当然のことであり、水に対処する技術を学びながら水と隣り合わせに、あるいは水の上に住むことは自然発生的なことである。

タイでは、従来から水が生活と密接な関係を持っており、水と共生する生活に適した水上住宅が発達してきた。近年は、生活面でみると、「水」を中心とした伝統的な生活は、様々な要因が絡み合って近代的な生活に移行しつつある。

現在でも高床式住居は、典型的な住居形式とされているが、かつては水上住宅（水に浮かぶ住宅）も典型的な住居であった。こうした住宅が最も多く存在したのは18世紀末から今世紀初頭にかけてである。この柔軟性と可能性を兼ね備えた住宅は、効率の良さと計画性のなさが前提となっている。住宅の内部は、陸上住宅と変わらない機能を備えているが、土地に定着していないという移動可能な自由さがある。交通網の中心が川や運河だった時代には、それが合理的かつ安全な住居形態であった。その上、1860年代頃のコレラの発生のため、天然のよりよい衛生システムという理由で、川沿いに家を建てられていた生活を、国王によって、川そのものの上に建てるように命令された。

しかし、1957年に道路が一般に公開されたのを皮切りに、1887年には市電、1890年には鉄道が導入され1980年代にいたっては高層ビルのラッシュとなった。これにより、完全に水路住宅の生活から陸路中心の生活へと移行していった。

水と共生した生活に適していると言われる水上住宅も、このような交通手段の変化のためでなく、様々な要因により減少した。建築材料の変化、ゴミの増加による水の自浄能力の限界、それが原因の水環境の悪化等多数の問題により、減少の一途をたどっている水上住宅は、伝統的な生活習慣から近代的な生活習慣に移行する場合に起こりうる問題を内包している。

人間にとっての豊かな生活は、人を包む最小単位である住宅空間の構成によって得られる。その土地の生活習慣、風土から自然発生した住まい方は、その土地の人々がより良い暮らしを求めた結果発生した空間である。

本研究は、タイのバンコク・ノイの運河沿い、及び、ピサヌロークのナン川上、プーケットのパンイ島といった伝統的な生活習慣を持つ水上住宅を調査し、地域的な特性および住まい方（居住空間の構成、しつらえ、空間活用）を把握することを目的としている。

## 2. 水上住宅の地域的特性

### 2. 1 調査概要

今回の調査では、タイ国内で水上集落3つを対象エリアとし、そのエリア内の住宅に対し住居内の空間構成、しつらえを調査している。室内空間の詳細を把握するために、実測、スケッチ、マッピングだけでなく、家具からマテリアル、調度に至るまで写真で記録を残している。さらに、地域性や生活実態を得るためにヒアリング調査も加えて実施している。

① 調査対象：バンコク・ノイの水上住宅（5件）とその居住者、ピサヌロークの水上住宅（106件）とその居住者（13件）、パンイ島の水上住宅（12件）

②住宅調査：マッピング、観察調査、実測調査

③居住者調査：ヒアリング調査

④調査期間：2001年7月27日～7月28日、および  
2001年12月10日～12月12日、および  
2002年8月19日～8月21日、および  
2002年12月26日～12月27日、および  
2011年9月2日～9月6日

## 2. 2 調査地域概要

### 2. 2. 1 バンコク

バンコク2001年の人口調査によると首都バンコクの人口は、572万人となっており、タイの総人口の9.1%を占めている。タイの総人口は、約6,230万人で、このうち、北部の第2の都市チェンマイは約160万人、その他コンケンには約175万人となっている。この調査結果をみても、タイの人口は均等に散らばっているのではなく、バンコクの一極集中ぶりがわかる。平均所得を比較してみると、1998年の全国平均世帯所得は12,729バーツとなっているのに対し、首都バンコクでは26,742バーツと2倍以上になっている。それは、バンコク首都圏地域では、農林産業従事者がほとんどおらず、製造業やサービス業など都心部での仕事が増えてきたためである。チャオプラヤ川の下流部に位置するバンコクは、シャム湾の河口からは約30km上流にあり、もとはアユタヤ時代に建設された小さな村であった。その村近を「バーンコーク」と呼んでいた。「バーン」は「水路または水路の形成された村」をいい、「コーク」はオリーブの木の種類「マコーク」という。

「オリーブ村」がバンコクの地名の由来である。「クルンテープ」の名称は1782年4月21日「バーンコーク」からチャオプラヤ川の東岸に遷都して、現王朝の都として定めたときに始まる。「クルンテープ」とは、「神の都」という意味がある。バンコクには、チャオプラヤ川（別名メ・ナム、タイ語で母なる川）の東岸の王宮周辺を中心に開発された、政治、経済、宗教、文化の中心となる建物が集中している。このエリアから東に向かってラマ1世通りや、ラマ4世通りが延び、ホテルやショップなどの商業施設が建っている。南北に走るバヤ・タイ通りや、ラチャダムリ通り沿いにはブランド店も含むデパートはショッピング・センターが多い。南側にあるニュー・ロード周辺にはオリエンタル・シャングリラなどの高級ホテルがあり、東のシーロム通りは、昼はビジネス街、よるは歓楽街という2つの顔を持つ通りである。このように、人や物が溢れ、いつも活気に満ちている大都市であることを感じさせる一面がある。だが一方では、街角の屋台や庶民が通う市場などそこに住む市民の生活を感じさせる一面もある。1960年以降、「開発の時代」を迎えてから、町には自動車が増え、交通渋滞が慢性化してきている。

バンコク・ノイは、バンコク中心部から北西約15kmに位置しており、チャオプラヤ川支流のバンコク・ノイ運河（川幅：

約40m)に、約2km入った地域に存在する。杭上住宅（ピラーハウス）が主で、周辺には湿地帯や果樹園が広がっている。

## 2. 2. 2 ピサヌローク

ピサヌロークの人口は、80万人であり、面積は1万815.8 km<sup>2</sup>である。ピサヌロークはバンコクの北498kmにあり、バンコクとチェンマイのほぼ中間に位置している。ナーン川が中央を貫通しており、その様子から「胸裂きの町」と呼ばれている。住民の多くは農業に従事している。東部は山岳地帯になっており、森林伐採も行われている。ナーン川、ヨーム川、沼地では、漁業や養殖が輪アズ化に行われている。また、歴史の町として、伝説や移籍や由緒ある寺院が残っている。9世紀頃からクメール帝国の支配を受け、ワット・チュラーマニーに残る神殿のようなクメールのアンコール様式の遺跡があらこちに残っている。

この町の名前「ピサヌローク」には「ヴィシュヌ神の世界」という意味もある。「ヴィシュヌ神」はヒンドゥー教の神で、ガルダに乗ってこの世界に舞い降りると考えられている。御釈迦様は、「ヴィシュヌ神」の化身と信じられている。タイではラーマ(国王)は人間界での「ヴィシュヌ神」の化身と考えられ、国王の通称名として「ラーマ〇世」と呼ばれる。

ナーン川には、水上住宅（ハウスボート）が浮かび、ピサヌロークの人々の生活を垣間見ることができる。木造船を改造した水上レストランもある。昼間、周辺の遊歩道には、所々に揚げ物やフルーツを売っている屋台がみられる。仮設テーブルに、近所の人や学生が集まり世間話をしている。夜6時になると、ナーン川東の橋の周辺にナイトバザールの屋台が並ぶ。ピサヌローク駅前一带もほぼオールナイトでいろいろな屋台が並んでおり、夜遅くまで活気に溢れている。

ピサヌロークの人々の生活で、主要な交通手段にオートバイがあり、2人乗りや3人乗りをしている若者たちをよく見かける。また、鉄道駅が町の中心にあり、バンコクとチェンマイの中間地点でもあるので、鉄道はもちろん、飛行機や長距

離バスも、ピサヌロークへの交通アクセスは充実している。

気候はサバンナ気候に属し、年間を通じて1日に最高気温は30℃から35℃で湿度は平均70～80%と非常に高い。そして、雨期（5月中旬～10月）と乾期（10月～2月中旬）と暑期（2月中旬～5月）の3つの季節に大きく分けられる。

雨期は雨が降ったりやんだりする日が続くが、1日中降っているわけではない。この時期は川が増水し、よく洪水が起こる。乾期は毎日さわやかな晴天が続く、雨はほとんど降らない。気温も比較的低く、クリスマスや年末年始の時期は、朝晩の寒さを感じるほどになる。暑期は最も暑く、年中40℃を超える、最も過ごしにくい時期である。

## 2. 2. 3 パンイ島

パンイ島は、島の面積が約6,400m<sup>2</sup>であるが、島のほとんどが断崖絶壁であり、島全体に住居を建設することがほとんど出来ない。そのため、島に寄り添う形で会場に杭上住宅が分布している。また、住宅の増加はモスクを中心にパンイ島の集落を拡大させている。

島全体の杭上住宅分布面積は48,000m<sup>2</sup>であり、住居の総戸数は340件で人口は約1400人分布している。さらに、その前は、住宅一件に住む人の割合は、11.54人である。住戸数自体は倍以上と、大幅に増加しているのに対し、人口に関しては減少していつている。また、世帯数が増加したために、同じ形をした新興住居が次々と建てられていることも原因の一つである。

建築素材は主に木造が多く、約300件木造とコンクリートの混合住宅が10件、コンクリート住宅が約60件である。以前は全て木材で建てられていたが、都市化や強風、津波による沿岸域の急激な浸食を防ぐためにコンクリートが導入された。さらに近年の急速な観光化にも後押しされ、船着き場近くの住宅を中心に新築、増改築をする住宅が急増した。屋根材や壁材としてトタンを使用する等、新しい素材も導入されてきている。

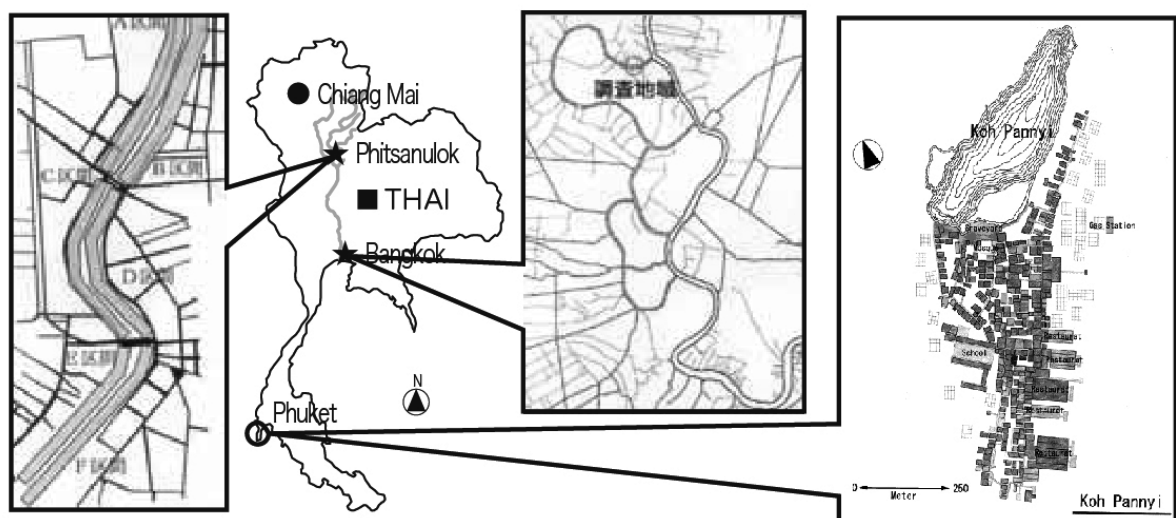


図1 調査対象地域



### 3. 居住実態と空間構成

#### 3.1 バンコク

##### ①住宅の規模

屋内規模の平均は約162 $\text{m}^2$ と大きく、一番広い住宅は果樹園労働者の6人家族の家で約240 $\text{m}^2$ であり、一番狭い住宅は医者家で74 $\text{m}^2$ である。

住宅の多くは、部屋数が5部屋以上あり、居間、台所、寝室、トイレ、物置と分かれている。部屋数の多い住宅は、寝室が2つ、3つに分かれていたり、物置、衣類収納場所などの部屋を設けている。

##### ②居住実態 (例)

居住年数15年の家で、4人家族が居住している。家庭の収入は平均を若干超すくらいだが、安定食ではなく収入も不安定である。建築面積は135 $\text{m}^2$ でタイの平均に比べると少々サイズは小さく、建築材料として使っているチーク材も建築してから現在まで交換していない。

住宅の空間構成としては、陸地側の入り口から家に入るとすぐに台所があり、ガスコンロや冷蔵庫など調理に必要な家具が並んでいる。仕切られた壁の奥には、家中央に配置された居間がある。クローゼットや棚など収納のための空間と調味料が置かれた食事用の空間、テレビやオーディオ機器が整ったくつろぎのスペースなど、用途によって同じ空間を使い分けている。寝室は河川沿いの部屋と角にある2箇所、家族4人が寝ている。テラスは使用済み食器や調理具などを運びやすいように、台所と隣接してある。食器洗いの他にも洗濯や水浴びなど、水の利用はほとんどをこのテラスで行う。



図2 室内写真

空間の構成としては、一つの単一な空間を間仕切りを使って寝室や書斎などプライベートな空間を作っている。基本的に水辺に近い部分に台所やトイレを設け、炊事や食事、洗物、水浴びなどがひとまとめに行われている。逆に寝室は、水辺とは反対側で比較的静かな家の奥に配されている。さらに仕切りを設けて、別の空間を構成している。居間は水場と寝室の間にもうけられ、その中でも入り口近くは客間、少し奥まった部分に、テレビやソファ、椅子などくつろぎの空間が配される。各空間が台所、居間、寝室などの役割を持っているが、居間が食事室になったり、寝室としてつかわれることも稀ではなく、それぞれの空間が時と場合によって多様に活用されるのも特徴的である。

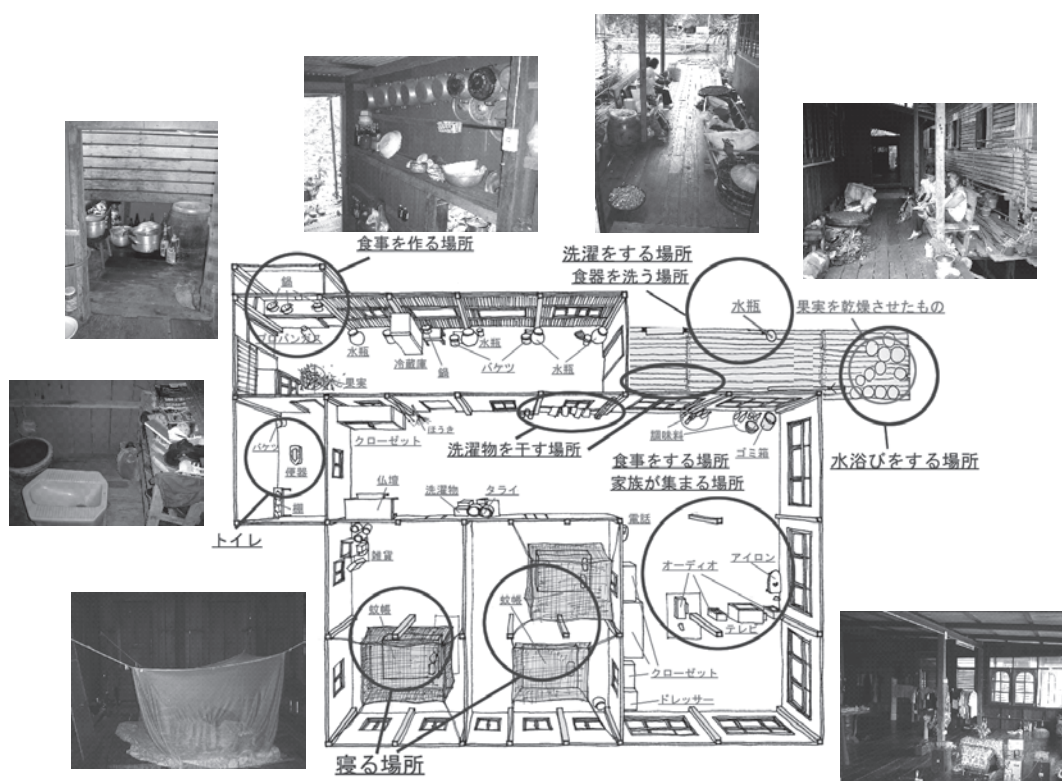


図3 生活行動図 (例)

## 3. 2 ピサヌローク

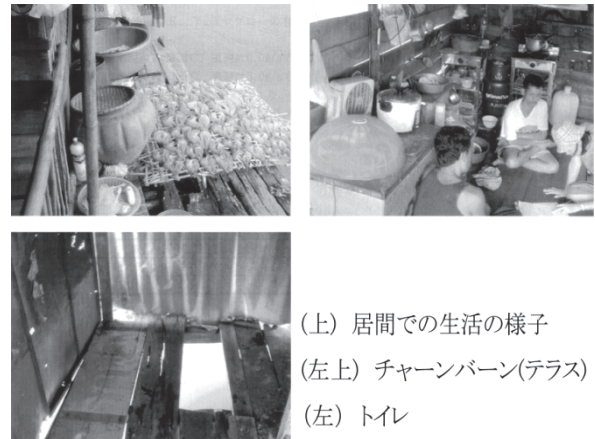
## ①住宅の規模

屋内規模の平均は約40㎡で、一番広い住宅はその土地で商売をしている商人の家で84㎡であり、一番狭い住宅は出稼ぎ労働者の家で屋内約17㎡である。

天井高の平均は2.6mであり、住宅の多くは部屋数が3部屋以上あり、居間、台所、寝室、トイレと分かれている。部屋数の多い住宅は、寝室が2つに分かれていたり、物置、衣類収納場所などの部屋を設けている。規模の小さい住宅では、寝室と居間を兼用するなど、一つの部屋を複数の用途で活用している。

## ②居住実態（例）

家自体が川の上に浮かんでおり、町中心部から家に入るのに、岸から家へ40mの鉄筋の橋を渡って家に入る。陸地側入口のほうに設けられた鉄の防犯用扉のついた玄関に入って右奥の部屋と、玄関に入って右奥の2つの部屋に分かれて家族5人が寝ている。洗面や水浴びは玄関から入って反対側にあるテラスをトイレと兼用して使っている。この家族は1日3回全ての食事を家で作り食べており、調理も食事も川側にあるチャーバーン（テラス）で行っている。食事を食べる空間にも机は無く、床に皿を置いて食べている。家中心の居間にはテレビやステレオなどが置かれ、くつろぐことの出来る空間となっている。



(上) 居間での生活の様子  
(左上) チャーバーン(テラス)  
(左) トイレ

図4 居住実態としつらえ

寝室に関しては、空間は分けてあるが、扉などではなくに空間を仕切ってプライベートを分けているだけである。このあたりの建物は移動することもあり、住居者の生活を中心とした構成になっている。住居内での基本的な食事、炊事、休憩なども玄関に入ってすぐのスペースで行うことができる。睡眠に関しても、玄関に入ってすぐの居間で布団を敷いて寝ることもあり、基本的には、玄関とテラスの間の空間のみでも生活できるような空間割がなされている。

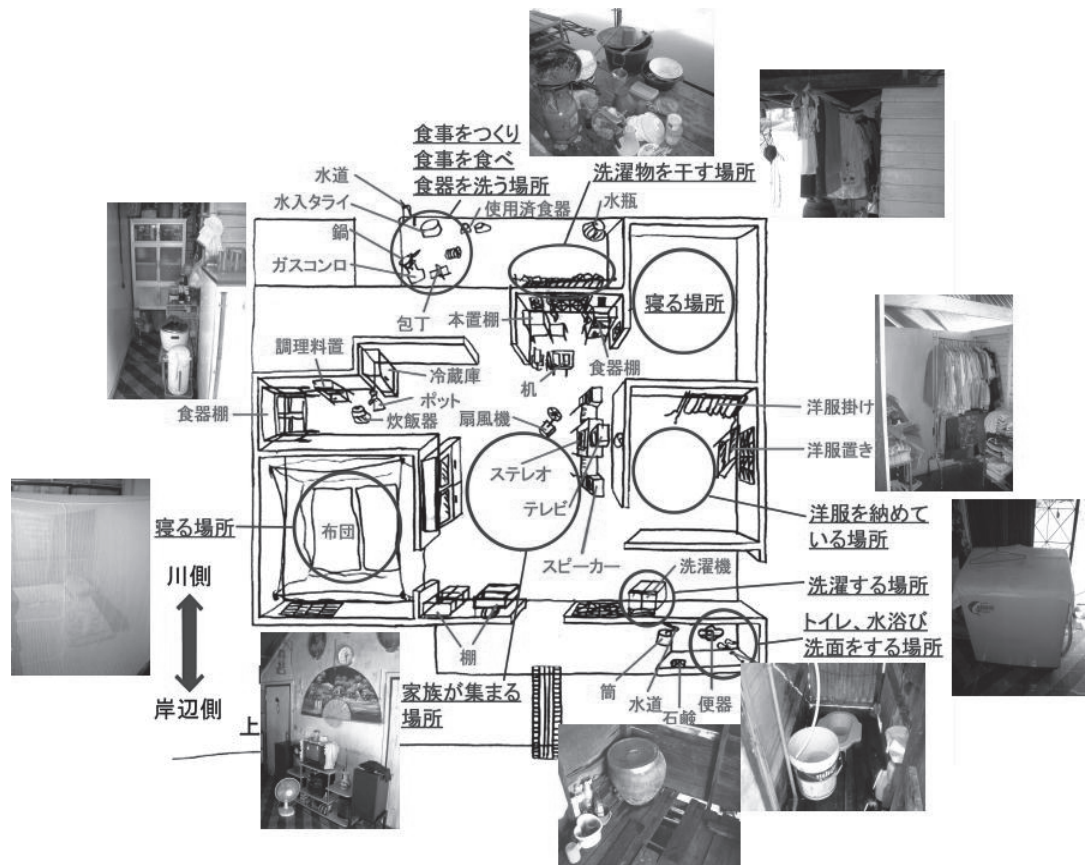


図5 生活行動図（例）



### 3. 3 パンイ島

#### ①住宅の規模

屋内規模の平均は約100㎡で、一番広い住宅は3世帯が共同で生活している157㎡の住宅で、一番狭い住宅は漁師が一人で住んでいる住宅で30㎡だった。この村では近年急速に観光化が進み、一人当たりの所得も上がったため、大半の住宅が、この5,6年の間に建て替えを行っていた。もともと敷地が狭いこともあり、2階建て以上の家も何軒もみられ、2世帯以上で暮らす家もあった。

家の大部分は居間としての活用がほとんどで、2階部分に寝室、水辺のテラスのほうに台所といった形が一般的である。

#### ②居住実態 (例)

この住宅は延べ床面積が70㎡の1階建てで、1世帯6人で暮らしている。壁材としてはトタンが使われており、降雨時にも室内への雨漏りはほとんどない。陸のほうから家へとつながる正面テラスを通り、家へはいると正面は間仕切りもなく、奥のテラス出入口までが抜けている。玄関を入ってすぐの場所は居間と書斎があり、亭主が仕事をしたり、家族が集まったりする場所として使用されている。一つ目の間仕切りを通ったところは、広い居間の空間で椅子やソファ、テレビ、など家族がくつろげるスペースになっている。炊飯器やアイ

ロンがあることから、炊事、火事など、くつろぐだけでなく様々な活動がうかがえた。その居間の部分と通りを挟んで反対側は、居住空間で、3つの寝室空間が連続している。その仕切りはベニヤを据え付けてあるものもあれば、棚やタンスを壁の代わりにしている部分もある。間仕切りで囲まれている陸側の部屋は、長女の部屋で、成人したため、プライベートな空間が与えられる。ここを抜けて、一番奥の空間は台所スペースになっている。テラスに近いというのが主な理由で、台所にはコンロや冷蔵庫、炊飯器、食器棚と炊事、食事に必要なものがそろっている。食事に関してはこの空間で食べることもたまにあるらしいが、ほとんどは中央の居間空間で家族みんなで食事をする。台所の奥、テラスに抜けるとすぐ左にはトイレ、右には洗濯機があり、洗いや水浴び、選択を干すのもこの空間で行っている。

空間の構成としては、陸地側から奥に行くにつれてプライベートな空間になり、生活の中心は家の中央で、外へ行くのも、テラスへ行くのも容易に行えるよう一本通りが通った部屋割、空間構成になっている。だが、間仕切りの多くは、トタンでなくベニヤなどが使われていることと、完全に屋根まで届いていないことから、生活の中で徐々に必要な空間が生まれ、少しずつ空間構成も変化している。

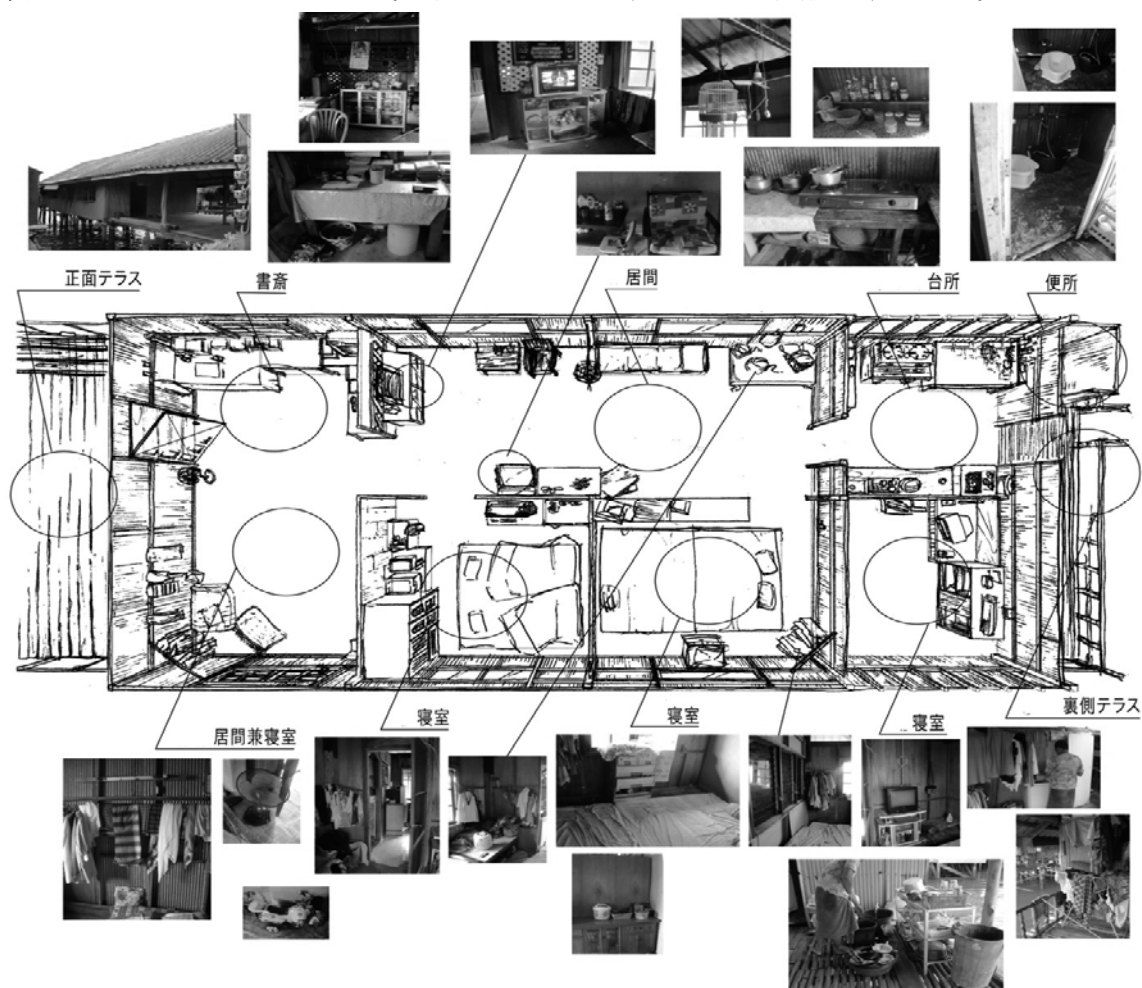


図6 生活行動図 (例)

表 1 空間構成比較表

項目		バンコク 杭上住宅 Bangkok : pillar house	ピサヌローク 水上住宅 Phitsanulok : Floating house	バンイ島 水上住宅 Koh Phanny : pillar house
住居概要	平均面積	約162㎡	約40㎡	約100㎡
	居住者数	2～6人	3～5人	1～10人
	部屋数	5部屋程度	3部屋程度	6部屋程度
	建築材料	木材、ガラス、石綿スレート	竹材、トタン板、木材、(ドラム缶)	トタン板、木材、(ドラム缶)
居間	配置	陸地側の入り口と運河川のテラスの間、家の中心に配置されている	家の中心に位置し、全ての部屋に繋がる	玄関を入ってすぐか、家の中心に位置し、主にテラス戸は反対側に配置されている
	家具・家庭用品	クローゼット、仏壇、電話、ゴミ箱、アイロン、オーディオ、テレビ、ドレッシング	食器棚、机、扇風機、ステレオ、テレビ、スピーカー、棚、洗濯機	食器棚、机、椅子、ソファ、扇風機、ステレオ、テレビ、スピーカー、棚、
	用途	食事、洗濯を干す、家族が集まる	家族が集まる	家族が集まる、客と対話する、寝る、食事
台所	配置	玄関を入ったところに配置され、運河沿いのテラスと繋がっている	運河沿いのテラスに配置されている	テラス側(主に玄関の反対側)に配置されている
	家具・家庭用品	鍋、プロパンガス、食材、水瓶、冷蔵庫、パケツ、調理用品、調味料、水道	冷蔵庫、ポット、炊飯器、調味料、包丁、使用済み食器、水入れタライ、ガスコンロ、鍋、水瓶	冷蔵庫、ポット、炊飯器、調味料、包丁、使用済み食器、水入れタライ、ガスコンロ、鍋、水瓶
	用途	食事を作る	食事を作る、食事を食べる、食器を洗う	食事を作る、食事を食べる、食器を洗う
寝室	配置	家の隅、陸側に複数配置している	家の隅、陸側に複数配置している	家の奥に複数、仕切られている
	家具・家庭用品	布団、雑貨、蚊帳	布団、雑貨、蚊帳、洋服掛け、洋服置き	布団、雑貨、蚊帳、洋服掛け、洋服置き
	用途	寝る	寝る	寝る
トイレ	配置	陸側の玄関に隣接して配置	陸側の玄関に隣接して配置	テラスに配置されている
	家具・家庭用品	便器、パケツ、棚、水瓶(中には便器が無く、板の間で用を足す家もある)	便器、パケツ、棚、水瓶、水道、石鉢、筒(中には便器が無く、板の間で用を足す家もある)	便器、パケツ、水瓶、水道、石鉢(中には便器が無く、板の間で用を足す家もある)
	用途	トイレ	トイレ、水浴び、洗面	トイレ、洗面
テラス	配置	岸辺の反対側、運河の上に位置している	岸辺の反対側、運河の上に位置し、台所とけんようになっている	岸辺の反対側、水辺に位置し、台所と近い位置に配置されている
	家具・家庭用品	水瓶、乾燥食料、タライ	タライ、水瓶、使用済み食器	タライ、水瓶、使用済み食器、洗濯機、物干し竿
	用途	トイレ	トイレ、水浴び、洗面	トイレ、水浴び、洗面、洗濯、食材の乾燥

#### 4. 空間構成と比較

##### 4. 1 杭上住居と水上住居

杭上住居は陸地に対して立地しているため、玄関部分は陸地側、テラスは水辺側(玄関と反対側)がほとんどで、玄関とテラスの間に居住空間を配置する空間構成になっている。それに対し、水上住宅は季節によって、また川・海の干満によって住宅が移動するため、必ずしも玄関が陸地のほうにあるとは限らない。基本的陸地に向けるが、場所が安定しないため、玄関までの通路も陸地とテラスに板を渡すといった方法をとっている。そのため、玄関前に広いスペースが必要となり、ほとんどの家が玄関部分にテラスを配置している。そのため玄関部分に居間と台所を兼用した空間が配置されている。室内環境においては、杭上住居は玄関とテラスの間に居間を設け、その両側に寝室などを設けている、それに対し、水上住居では玄関側に生活のスペースがあるため、家の奥はプライベート空間(寝室)などを配置した構成となっている。この点においては、杭上住宅のほうが、私的な部分と公的な部分を分けて生活することができ、暮らしやすい空間構成といえる。

ちなみに、水上住宅の平均面積が小さいのは、ボートの上に建築するという点において限度があり、大きな空間を作ることができないためである。

##### 4. 2 杭上住宅の比較

同じ杭上住宅でも地域が異なれば、その空間構成も多少の違いが出てくる。今回の対象地域であるバンコクとバンイ島大きな違いは河川の流域と海に浮かぶ島といった立地条件が主にあげられる。河川流域では川の長さも長く、隣棟間隔も広いため、増設や建設の際にも横に広く一つの部屋を大きく、正方形に近い家になる。そのため、住宅内の動線が縦横に動き、入り組んだ空間構成がなされる。間仕切りが多いのもそのためである。それに対して島では建設可能範囲が狭いため、隣棟間隔が狭まり、住宅が陸地から海へ縦長に、もしくは、2階建てになるなど、縦の伸びもある。そのため、住宅の形状は縦長が多く、動線も玄関から、テラスに向けて直線状に抜けている家が多くみられた。

バンコクの杭上住宅では、動線計画が困難なこともあり、半数近い家が、玄関近くに台所と居間を配置し、家の奥にプライベート空間を配置している。バンイ島では奥のテラス近くに台所がある配置計画が多く、玄関付近は対客用に開放している家も多くみられる。

#### 5. おわりに

以上より、一部ではあるが、タイの水上住宅(杭上住宅、水上筏住宅)の空間構成やしつらえについて、一定の知見が

得られた。古くから水を中心に生活してきたことから、水回りを中心とした空間の構成、住宅形態の違いによる構成の違いなど空間構成に対して水が少なからず影響している。未だに残る「水」を中心とした伝統的な環境共生の生活と、一方で営まれている近代化、あるいは西洋化された生活との関係や、この近代化・西洋化に至る変容過程について、さらに検討を加えることが重要である。今後は、近代化が住居内の空間構成にどのような影響を与えているのか、また、水上住宅での行動パターンにどのような変化を与え、そこから室内の利用状況にどのように影響を与えるのかを明らかにするために調査研究を進める必要がある。

なお、本研究は、平成13年～15年度科学研究費補助金（基盤研究A（2））と財団法人アサヒビール学術振興財団2011年度研究助成を受けて実施したものである。

●参考・引用文献

- 日本建築学会 「建築設計資料集成2」 (株)丸善1960
- 石井米雄、吉川利治 「タイの事典」 同朋舎出版1933
- スメート・ジウムサイ、西村幸雄 「水の神ナーガアジアの水辺空間と文化」 鹿島出版会 1944
- 中村茂樹、畔柳昭雄、石田卓矢 「アジアの水辺空間—くらし・集落・住宅・文化—」 鹿島出版者 1999
- 大坂孝臣、権現智士 「タイの水上居住に関する研究」 近畿大学工学部 卒業論文 2002
- ・松岡伸浩、安藤祐樹、境久美子、中川幸子 「水上住宅の様態と居住実態に関する研究—タイ・ピサヌローク—」 近畿大学工学部 卒業論文 2001